

52. 自然と人為の相克

医事万華鏡

2022年4月

に、体外受精や顕微授精を含む基本的な不妊治療が保険適用となり、早2年が経ちました。このように不妊治療は身近な存在

となり、また治療を受けられる方が増えてきたことで、人工生殖はむしろ現代人のコンセンサスへと変わりつつあります。ただ「神の摂理」たる生命の誕生に人為的操作が加わることを良しとしない」と考えられる方が一定数いることもまた事実です。宗教的土壌を持たなくても、子どもの誕生にいかに関与を持つか、親子の概念はどうあるべきか、われわれは法整備に加え、生命倫理的な価値判断の変容が迫られていると言えるでしょう。

そんな現代の生殖医療を19世紀前半に先取りした作品がありました。皆さんお馴染みの『フランケンシュタイン』(1818)です。——主人公のヴィクター・フランケンシュタインは、生命の神秘を解明する研究に身を捧げ、盗み出した死体を使って自然科学と錬金術とを駆使し、理想的な人造人間を創造。しかし、その人造人間は予想に反し醜い容貌の怪物と化し、絶望したヴィクターは実験室から逃

亡。残された怪物は山中を彷徨い、遂に生みの親たるヴィクターを探し出すと、愛(自分の伴侶を創ること)と幸福を得る権利を依頼する。

一旦はその依頼を引き受けたヴィクターであったが、怪物が増える未来を恐れて製作を中断。怪物は復讐としてヴィクターの婚約者や友人を殺してしまふ。今度は復讐心に駆られたヴィクターが怪物を追い求めて北極圏に向かうも、折り悪しく船の中で命を落とす。怪物はその亡骸を前に救いようのない自らの運命に絶望し、命を絶つため北極の氷原に向かい姿を消す——。

この悲劇的で後味の悪い物語の中で、作者は大きな示唆を与えてくれています。つまり、「限度を知ること」と「人間間の感情に配慮すること」。ヴィクターは「実験室の中」で人工生命の創造に熱中するあまり、道徳も倫理も度外視し、自然の境界線を越えてしまいました。生みの親としての責任も果たしませんでした。従って、ヴィクターの所業の現代版の如き生殖医療においても、命の創造の完遂に比べ、生命倫理への配慮が二の次になりがちです。一方で、「子宮の中」で子を懐胎する性としての女性は、本来、毎月の月経によって否応なく自然のリズムに組み込まれることで、体感的に妊娠を「神(=自然)の摂理」と捉えることができるそうです。急速に進展する生殖医療に対して抱く人々の期待と不安。神の領域と人間のエゴの闘ぎ合い。科学技術が進展しても、生命とは何かという厳粛かつ根源的な問いを、生殖医療はわれわれに常に投げかけています。(JMS主幹・野村元久)

